

重要文化財 絵画土器(船をこぐ人)



からこ かぎ
唐古・鍵遺跡(奈良県田原本町)
弥生時代中期 京都大学総合博物館蔵

1937年の唐古・鍵遺跡第1次調査で出土した絵画土器。壺の胴部に、船に乗り^{かい}で左方向へこぐ人々が描かれている。船は弥生時代の絵画土器によく描かれるモチーフの1つだが、乗船者の姿まで描写したものは数少ない。

この船は船首・船尾とも上に立ち上がる形をしており、丸木舟に船板や船首材などの部材を取り付けた準構造船だと考えられる。弥生時代に日本本土と大陸や沖縄諸島を行き来する遠洋航海で使われたのも、このような準構造船である。この土器が出土した唐古・鍵遺跡は奈良盆地の中央部に位置する内陸の集落だが、大和川を通じて大阪湾沿岸部とも広く交流をしていた。

乗船者のうち、左端の舳先^{へさき}にいる人物の櫂^かの近くからは3本の放射状の線がのびている。これが何を表すかについては諸説あり、^{とあみ}投網漁、^{うが}鵜飼漁、神を迎える目印や依り代^{よしろ}となる幡^{はた}を捧げ持っている、などの解釈がある。右端の^{ども}艫^かにいるのも、鳥とする説と、欠損部に上半身や頭部が描かれていたと考え人物だとする説とがある。いずれにしても、絵画土器は農耕祭祀に供えられた特別な土器とされることから、漁の様子だとしても単なる日常風景の描写ではなく、^{ほうじょう}豊穡への祈りを込めた図であると考えられる。

あいち朝日遺跡ミュージアム

■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地 ■ TEL: 052-409-1467 ■ 駐車場 15 台

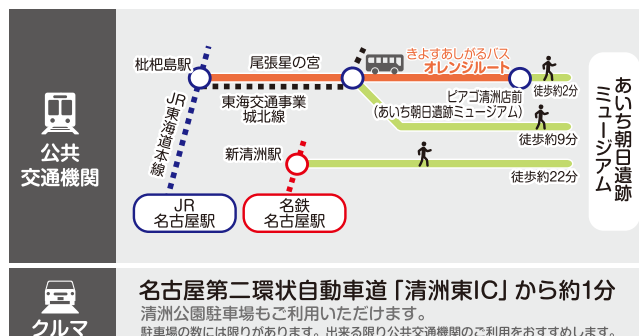
企画展

「弥生人といきもの2023
魚をとろう！」

編集・発行：あいち朝日遺跡ミュージアム
2023(令和5)年7月22日発行



AICHI ASAHI
SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム



AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム

はじめに

あいち朝日遺跡ミュージアムでは、大人だけでなく、子供たちにも朝日遺跡や弥生時代について興味を持ち、理解を深めてもらうため、弥生時代の人々と様々な「いきもの」との関わりについて紹介する企画展を毎年開催しています。

3回目となる今回は、弥生時代の漁の対象となった「魚」を取り上げます。河口や海に近い朝日遺跡の集落では漁が盛んに行われ、各種の漁労具や魚の骨が出土しています。

朝日遺跡で出土した多数の漁労具や魚の骨をはじめ、日本各地の遺跡から出土した魚や海のいきものに関連した出土品を展示し、弥生人と魚の関わりについて紹介します。

目次

はじめに2

魚をとろう！3

魚から何がわかる？6

大物にいどむ！7

重要文化財 絵画土器（船をこぐ人）8



漁をする朝日遺跡の弥生人(ジオラマ)

凡例

- ・本書は2023年7月22日から9月18日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「弥生人といきもの2023 魚をとろう！」の展示パンフレットである。
- ・本書の構成と実際の展示構成は異なる部分がある。
- ・掲載資料の時期区分は、朝日遺跡出土品については弥生時代前期(B.C.6～B.C.4c)、中期(B.C.4～B.C.1c)、後期(A.D.1～2c)とするが、他地域の出土品については所蔵者の見解に従う。
- ・掲載資料のうち重要文化財には「◎」を付している。
- ・掲載の魚類生鮮標本の写真はすべて、神奈川県立生命の星・地球博物館（瀬能 宏撮影）提供である。
- ・それ以外の掲載写真・図等のうち、提供者と所蔵者が同じ場合は、所蔵者のみの記載とする。どちらも記載のないものは、本ミュージアム所蔵である。
- ・本書の執筆・編集は、田中恵美が行った。

謝辞

本展示会の開催にあたり、下記の機関並びに各機関の担当者の皆様にご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。（五十音順、敬称略）

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター、伊都国歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、京都大学総合博物館、神戸市立博物館、小松市埋蔵文化財センター、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、田原本町教育委員会、鳥取県とっとり弥生の王国推進課、ニフレム、公益財団法人広島市文化財団、独立行政法人国立文化財機構 文化財活用センター、文化庁、三重県総合博物館、三重県埋蔵文化財センター

主な参考文献

- 広島市教育委員会 1984『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』広島市の文化財30
島根県教育委員会 1989『西川津遺跡3』朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書5
財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター 2002『青谷上寺地遺跡42』鳥取県教育文化財団調査報告書74
田原本町教育委員会 2015『唐古・鍵遺跡 考古資料目録Ⅰ―土器編Ⅰ（絵画・記号・文様）―』
大阪府立弥生文化博物館 2017『海に生きた人びと 漁撈・塩づくり・交流の考古学』

表紙：絵画土器（船をこぐ人）（部分） 京都大学総合博物館蔵

魚をとろう！

海に囲まれた日本列島では、古くから漁が盛んに行われてきました。沖縄県サキタリ洞窟遺跡では、世界最古となる約2万3千年前（後期旧石器時代）の貝製の釣針が出土しています。本州最古の釣針は神奈川県なつしまの夏島貝塚から出土した約1万年前（縄文時代早期）のイノシシの骨製のものです。最新の化学分析からは、縄文土器も魚類を煮炊きするために登場したと考えられており、狩猟採集社会であった縄文時代を通して漁労技術は高度に発達しました。

その技術は弥生時代に入っても受け継がれており、朝日遺跡をはじめとする沿岸部の集落からは様々な漁労具が出土しています。弥生人は魚の種類に合わせて、道具や漁法を巧みに使い分けていました。

■ヤナ漁



朝日遺跡出土のヤナ遺構 愛知県埋蔵文化財センター提供

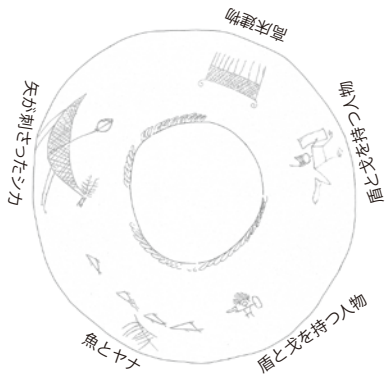


ヤナ漁の様子(ジオラマ)

朝日遺跡では弥生時代のヤナ遺構がみついている。ヤナとは川や水路に障害物を設けて水流をせき止め、誘導されてきた魚類を捕える施設。朝日遺跡のものは上流に作られた木組みで水流を調節し、下流に作られたスノコとの間に魚を追い込んで捕獲する仕組みになっている。



絵画土器（魚・ヤナ・人物）（部分）
清水風遺跡（奈良県田原本町）
弥生時代中期 田原本町教育委員会蔵



壺の真上から見た絵画の配置

列をなして泳ぐ魚の下に、ヤナらしいものが描かれている。この絵は左の図のように、大型の壺の肩を囲むように連続して描かれた絵の一部である。左隣には矢が刺さったシカが描かれているので、陸上の狩猟と水中の漁の様子を並べて描いていることになる。



◎絵画土器（魚）
唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）
弥生時代中期 田原本町教育委員会蔵



〔参考〕銅鐸に描かれた魚とサギ
（国宝 桜ヶ丘4号銅鐸）
神戸市立博物館提供

稲作をする弥生人に最も身近な魚は、水田や水路で見かけるコイやフナなどの淡水魚だった。絵画土器や銅鐸に描かれる魚の多くは三角形の胴体をしているが、これはフナの体形に似ている。害虫や水草を食べてくれ、貴重な食料にもなる、弥生人にとって大切な存在だったようだ。

し とつ 刺突漁



◎シカの角製の鉾 朝日遺跡



◎シカの骨製のヤス 朝日遺跡

弥生時代の漁労具の中で出土量が多いのは、鉾やヤスなどの魚を突き刺してとらえる刺突漁に使う道具である。朝日遺跡からの出土品では、獲物から抜けないようにカエシがあるものを鉾、ないものをヤスとしている。

鉾はシカの角で作られたものが多く、長さ6cmほどの小型のものから、15cm以上あり複数本を組み合わせて大型魚漁に使ったと思われるものまでみつかっている。

ヤスはシカの中手骨・中足骨（人間ならば掌や足の甲を構成する骨）で作ったものが多いが、朝日遺跡や鳥取県の青谷上寺地遺跡では木製ヤスも出土している。

釣 り 漁



◎釣針(左:シカの角製 右:イノシシの牙製)
朝日遺跡

弥生時代の釣針は、シカの角やイノシシの牙で作られたものが多い。左写真では、左がシカの角製の結合式釣針の軸部、右がイノシシの牙製の単式釣針である。結合式釣針とは、糸を結びつける軸と魚につける針を別の部材で作し、組み合わせたもの。釣針の大型化や破損時の補修が容易なため、大型魚に適している。



鉄製釣針 長う子遺跡
(広島県広島市)
弥生時代後期
広島市蔵

現代のものと形が変わらずほぼ欠損もない、貴重な弥生時代の鉄製釣針。鋭いハリ先にはカエシが作られ、かかった魚を逃がさず、また、エサも外れにくい。糸を結びつけるチモトには切込みが入っており、釣糸が外れにくいように工夫されている。弥生時代の鉄製品は工具類が多く、釣針の出土点数は極めて少ない。



ポイント状骨角器
青谷上寺地遺跡
(鳥取県青谷町)
弥生時代後期
鳥取県蔵

青谷上寺地遺跡で複数点出土している骨角器で、鈎状骨角器ともよばれる。多くはシカの角で作られている。結合式釣針の針部的一种ではないかと推定されており、鈎状の部分に軸となる部材を組み合わせ、孔に糸を通し固定して使うと考えられている。

網 漁



タモ枠 青谷上寺地遺跡(鳥取県青谷町) 弥生時代中期 鳥取県蔵

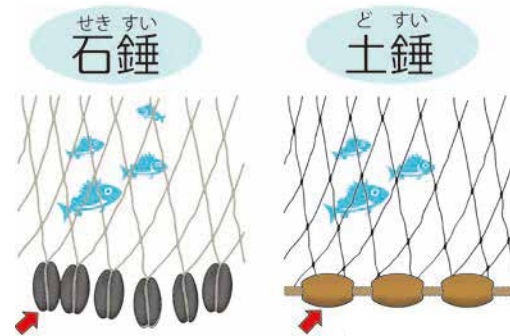
タモ網の枠。三つまたに枝分かれした木を利用して作られている。中央の枝は切り落として左右の枝だけを残し、網を張る三角形の空間を作っている。タモ網は単体ですくい網漁に使われるが、刺突漁や釣り漁の補助として、引き寄せた魚をすくい取るのにも重要な道具である。



◎石錘 朝日遺跡



◎土錘 朝日遺跡



※どちらも復元例 三重県埋蔵文化財センター提供

石錘や土錘は漁網のおもりである。

朝日遺跡からは様々な石錘が出土しているが、比較的大型のものが多く中には10cmを超えるものまである。刺し網漁のように海中に網を仕掛ける漁や、何人もが協力しながら網を引く地引き網漁などの、大がかりな漁が行われていたのかもしれない。

土錘は管状土錘とよばれる種類のもので、弥生時代に大陸から伝わったものである。朝日遺跡では直径3～4cm、高さ4cm前後の円筒形のものが多く出土している。

タコ壺漁



イイダコ壺 いけみそね
池上曾根遺跡(大阪府和泉市・泉大津市)
弥生時代中期 大阪府立弥生文化博物館蔵



復元したタコ壺に入るイイダコ ニフレル提供

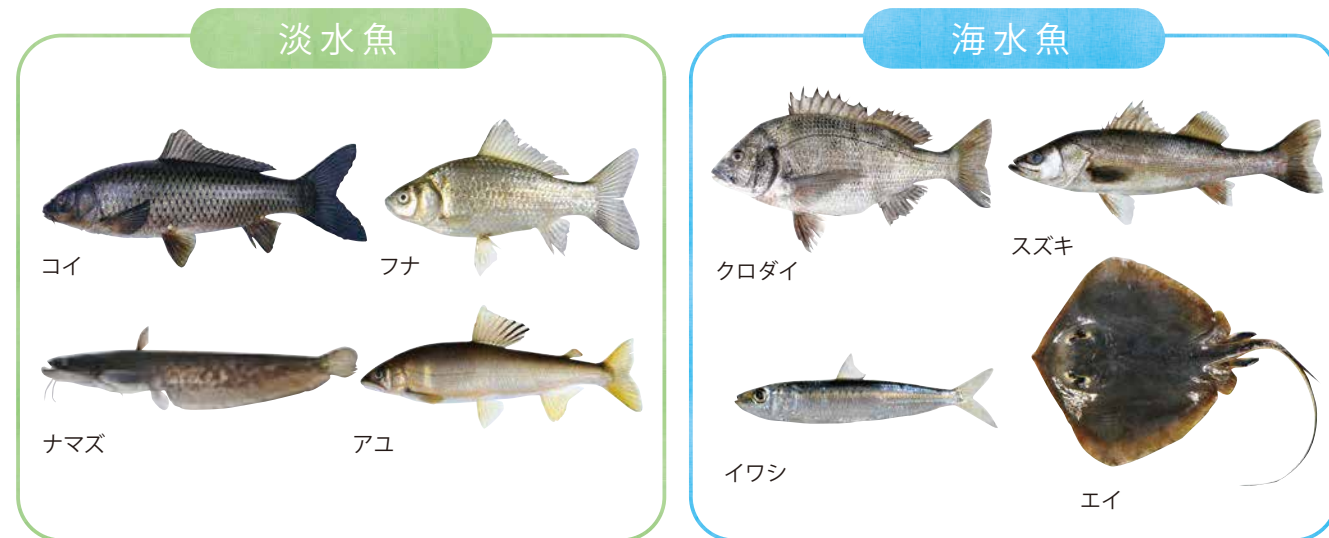
小型のイイダコ用のタコ壺。円い孔に縄を通してしばらく海に沈めておくと、タコが中に入るので、そこを壺ごと引き上げる。

池上曾根遺跡では盛んに行われた漁だったらしく、2000点以上ものイイダコ壺が出土している。その理由として、イイダコが稲の豊作を願う祭祀に欠かせなかったため、とする説がある。そもそもイイダコという名は、産卵直前のメスが抱える卵が、米飯がぎっしり詰まったように見えるためについたとされており、その姿にあやかっただけである。

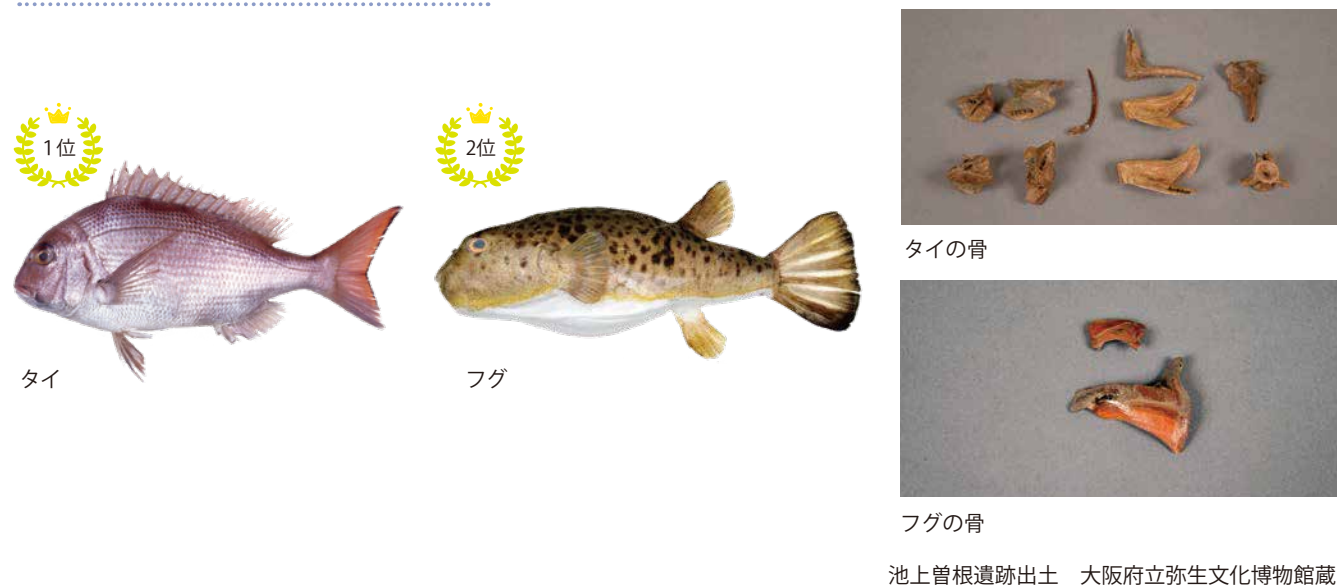
魚から何がわかる？

魚は種によりすむ場所が異なります。そのため、集落の遺跡から出土した魚の骨を調べれば、そこにくらした人々が、主にどこで漁をしていたのかもわかります。朝日遺跡の場合、淡水魚と沿岸部にすむ海水魚が多い、という結果が出ました。朝日遺跡からは外洋性の大型魚漁にも使えるような大型の漁労具も出土していますが、水田の周辺や比較的集落に近い海での漁の方がむしろ盛んだったようです。

朝日遺跡でとられていた魚



池上曽根遺跡でとられていた魚



もちろん、現代でも魚ごとに特産地が異なるように、各地の集落ごとに主な対象魚は異なっていました。大阪湾から2kmほど内陸にあった池上曽根遺跡では、タイとフグの骨が多く出土しています。

フグには無毒な種もありますが、写真のフグの骨のうち小さい方は、特に美味とされていますが、内蔵や皮に猛毒を持つヒガンフグのものです。弥生人がフグの調理法を知っていたことも驚きですが、タコ・タイ・フグと今と変わらぬ大阪グルメがすでにそろっているのも興味深いところです。

大物にいどむ！

日本海沿岸部には弥生時代に大型魚の漁が盛んに行われた集落が多く、大型の漁労具が出土しています。また、大型魚や危険な魚、クジラなどは海の近くでくらす人々にとって、海の豊かさや恐ろしさの象徴でもありました。その危険で強い力にあやかるためか、弥生時代の祭祀具にはこれら海の大物を表現したものがあります。



結合式釣針 西川津遺跡(島根県松江市)
弥生時代前期 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター蔵

長さ14cm、幅9cmもある日本最大級の結合式釣針。おそらくサメやマグロなどの大型魚専用のもので、軸がシカの角、針部がイノシシの牙で作られており、結合部には乳白色の接着剤も残っている。元は縄文時代に西北九州の漁民だけが使っていた特殊なタイプの釣針であり、稲作技術と共に山陰に伝わったと考えられている。



◎琴天板 青谷上寺地遺跡(鳥取県青谷町)
弥生時代中期 鳥取県蔵 ※展示資料はレプリカ

サメが描かれた琴の天板。弥生時代の琴は水に関係する祭祀に使われたと考えられている。青谷上寺地遺跡の近海は現在でもシュモクザメの群れなどが現れる地域で、サメを描いた道具が何点もみつかり、強さと恐ろしさをよく知っていたのだろう。この地域はサメが登場する神話「因幡のシロウサギ」の舞台にも近い。



◎魚形木製品 八日市地方遺跡(石川県小松市)
弥生時代中期 小松市埋蔵文化財センター蔵
※展示資料は大阪府立弥生文化博物館蔵のレプリカ



テンジクダツ



バンドウイルカの下顎骨 青谷上寺地遺跡(鳥取県青谷町)
弥生時代後期 鳥取県蔵



〔参考〕壺に描かれたクジラの絵(部分)
深江城崎遺跡(福岡県糸島市)
弥生時代後期 伊都国歴史博物館提供

イルカを含むクジラ類の骨を加工した道具は北部九州や青谷上寺地遺跡のほか、朝日遺跡でも出土している。しかし捕鯨が盛んだったのは壱岐などの限られた地域で、漂着した個体を利用して地域も多かったようだ。

弥生人にはあまり身近な存在ではなかったためか、弥生時代のクジラの絵は大変珍しく、日本国内ではわずか2例しかない。そのうちの一つが上の絵で、銚子を使った捕鯨の様子が描かれている。



シュモクザメ

テンジクダツをモデルにしたと思われる木製品。約92cmとほぼ実物大に作られており、細長い体、するどいアゴ、大きな眼などの特徴をよく捉えている。ダツ類は海面近くを群れで泳いでいる魚で、光るものに向かって突進する習性があり、海面上にジャンプすることもできる。その勢いはすさまじく、船に突き刺さったり、刺された人が死亡する事故まで起きている。危険な魚だからこそ、その姿に似せた祭祀具を作り、海での安全を祈ったのかもしれない。